

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 28 日現在

機関番号：11302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381061

研究課題名(和文) 発達障害の子どもを包括する通常学級の指導法に関する質的研究 現象学アプローチ

研究課題名(英文) The Qualitative Research in the Classroom Instruction to Include the Developmental Disordered Children: The Phenomenological Approach

研究代表者

田端 健人 (TABATA, Taketo)

宮城教育大学・教育学部・教授

研究者番号：50344742

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：発達障害の子どもを包括する学級と授業づくりの指導方法の原理的条件として、学級の子どもの多様性が肯定され尊重される風土、発達障害の子どもを含め、どの子どもにも活躍の機会があること、身体的情動的な共鳴や呼応を多くすること、活動の時間空有感的構造化などが、明らかになった。実践方法としては、「子どもの哲学」と呼ばれる対話による探求方法のハワイスタイルをもとに、みやぎスタイルを開発し、この指導法が本研究課題において有効であることを示した。

研究成果の概要(英文)：This research reveals the theoretical essence that guides the children in the classroom to the inclusive community with the developmental disordered children as the following way; 1) to create the climate that accepts and respects the diversity of every children, 2) to give each of children a chance standing in the spotlight, 3) to increase the opportunity synchronizing children's physical and emotional movements with each other and 4) to structure the space and time of the activity. Practically, I developed the learning method called "philosophy for children in Miyagi style" based on Hawaiian style and indicated its significant effects in the way of the phenomenological qualitative research.

研究分野：教育学

キーワード：通常学級 発達障害 質的研究 現象学 対話 子どもの哲学 コミュニティ 受容

## 1. 研究開始当初の背景

まず、本研究のいう「発達障害の子ども」は、医療機関で発達障害と診断された児童生徒はもちろんのこと、そのように診断されていないなくても、教師から見て発達障害の疑い(可能性)がある児童生徒をも含む概念である。

(1) こうした発達障害の子どもに関する専門的研究は膨大に蓄積され、信頼できる支援方法も、多数開発され実践されている。しかし、その多くは、医療機関や特別支援学校、あるいは心理実験的状况において研究開発された支援方法であり、発達障害の子どもを含む20名前後の通常学級の子どものコミュニティを、研究対象としているわけではない。それゆえ、そうした指導法は、特別支援学級等での少人数指導には有効であっても、通常学級における発達障害の子どもとその周囲の子どもの支援指導法としては、必ずしも十分ではなかった。

一方筆者は、本研究に着手する以前から、通常学級のフィールドワークを重ねており、そこで発達障害の子どもを包摂する指導法について、しかも従来の発達障害の子どもの支援方法の主流とは異なる有効な指導方法に関して、経験的な知見を得ていた(cf., 田端2013)。

(2) また、研究開始当初において流布していた発達障害児の研究と実践は、理論的背景として、主に認知心理学の「心の理論(theory of mind)」に依拠しており、対人関係の障害の中核症状を、「他者の心を推論する能力の欠如」としていた(cf., フリス1991, 杉山他2006)。

ところが、2010年前後から、脳神経科学のミラーニューロン説による批判によって、発達障害児の「心の理論」説の妥当性が揺らぎ始めていた。しかも、ミラーニューロンの発見には、本研究が理論的基盤とする現象学が寄与しており(cf., Iacoboni 2008) ミラーニューロン説に基づく発達障害児の支援指導法も、筆者がフィールドワークで参与観察してきた事例と整合的であった。それゆえ、ミラーニューロン説にも通じる現象学的他者理論を導きとした発達障害児の理論的説明が可能かつ必要であり、それを背景とした新たな支援指導方法が開発可能な状況になっていた。

(3) さらに、本研究は、実践現場の参与観察と記録を基礎データとする質的調査研究であるが、こうした研究方法の学術的基礎づけは、十分ではなかった。この不十分さを克服する学術の一つとして、教育哲学や教育方法学の領域でも、現象学が期待されていた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、第一に、通常学級におい

て、発達障害の子どもを包括するコミュニティ形成や授業実践に寄与する支援指導方法を、事例を基に解明し、より効果的なものへと開発し、実践現場にフィードバックすることである。

これと並行して、第二に、本研究の研究手法そのものを学術的に基礎づけ、本研究の学術的妥当性を担保し、高めることを目的としている。

## 3. 研究の方法

本研究は、現象学的アプローチによる実践現場の質的研究法を、方法としている。実践現場を参与観察したり、聞き取りをしたりして一次データを収集し、それらの事例やエピソードを現象学的な観点から解釈することで、有効な支援指導方法を明らかにする手法である。

現象学は、19世紀から20世紀への転換期にエドムント・フッサールによって創設された現代哲学の一つであるが、研究対象への接近方法とその分析解釈の方法との両方の点で、様々な研究領域で応用されてきた哲学である。例えば、心理学や精神医学、社会学、看護学など、その応用範囲は広い(cf., [図書])。

本研究は、(1) 実践現場にアプローチする調査の方法論と、(2) 調査によって得たデータの分析解釈との両方において、現象学を学術的な根拠としている。その詳細については、[図書]を参照いただきたい。本研究における特色を記すと、次のようになる。

(1) 第一に、小中学校などの教室に研究者が入ることにより、研究者の存在が、児童生徒や教師に影響を与え、彼/彼女らの知覚・認知・心情・態度・行動・人間関係などを変容させることを、研究の射程に入れる。言い換えれば、研究者は、実践現場の観察者であるにとどまらず、共演者でもある、という立場をとる。それゆえ、研究者が観察に徹している場合でも、アクションリサーチになっていることを自覚しつつ観察と解釈を行う。

第二に、ひとりの人間としての研究者に備わる自然な感知能力を信頼し、この能力を十分に発揮して観察を行う。例えば、児童生徒や教師の言葉を聞いたり、彼/彼女らの表情や振る舞いを見たりすることはもちろんであるが、それにとどまらず、教室の空気や場の雰囲気をも敏感に感知し、研究の対象とする。場の空気感は、私たちが、自然的態度で生活世界を生きている場合には、いたって自然に感得され、私たちの思考や言論や行動に影響を与えているが、従来の研究方法論では積極的に評価されることはなかった。これに対して、現象学は、個々人のこうした自然な感得能力を学術的に評価し、研究方法の俎上に載せることを可能にする(cf., 田端2013, [図書])。

本研究の文脈では、例えば、発達障害の子

どもを受容する学級の「空気」が実践上も研究上も重要になるが、現象学的方法論に依拠することで、その重要性を学術的に根拠づけることができる。

(2) 発達障害の子どもを包括する教育実践を実現する決定的な条件の一つは、そうした子どもをはじめ、クラスの子どもたちの個性と多様性が受容、肯定、尊重される学級の「空気」である。この条件を学術的概念として捉えるために、本研究では、オットー＝フリードリッヒ・ポルノウの雰囲気論、彼が導きとしたマルティン・ハイデガーの気分論、また複数の人々が見て聞くことのできる公的領域を解明したハンナ・アーレントの活動論などの現象学的概念を、教育実践事例を解釈するための主な導きとした。

#### 4. 研究成果

本研究を通して顕在化した発達障害の子どもを包括する学級と授業づくりの主要な条件は、次の5点に要約できる。

学級の子どもたちの個性的な多様性を相互に受容・肯定・尊重する風土。

発達障害の子どもを含め、学級の全ての子どもが、おだやかな脚光を浴びること。

授業その他の活動で、学級の子どもと教師が身体的情動的に共鳴・同調・呼応する場面を多くつくること。この条件は、脳神経科学のミラーニューロン説からも支持される。

活動が時間的空間的に構造化されていること。この条件は、TEACCEに代表される従来の発達障害児の支援指導方法でも提唱されていた。

それと同時に、活動がパターン化され固定化されないために、即興性や意外性の余地に開かれていること。

これらの条件を原理として含んでいる支援指導方法であれば、具体的にはどのようなメソッドであっても、実践上の効果を期待できる。

これらの条件を満たす支援指導方法として、筆者は、本研究に着手する以前から、フィールド調査により、身体表現を土台とするある手法に着目していたが(cf., 田端 2011)。この手法は、特定の実践者の個人的な技量にとどまり、他の多くの実践者への伝達や共有が難しいという課題に直面していた。

そこで、広く共有可能な「メソッド」として、本研究で着目していたのは、「子どもの哲学(phi losophy for children)」通称「p4c(ピー・フォー・シー)」と呼ばれる対話による探求の授業方法である。このメソッドは、特に発達障害の児童生徒を意識して開発さ

れたわけではないが、本研究の視点から見ても、有効であると考えられた。このメソッドは、1970年代に米国のマシュー・リップマンによって開発され、その後世界各地に草の根的に広がっているが、1980年代半ばに、ハワイ大学のトーマス・ジャクソンによって、ハワイスタイルの理念と実践が新たに開発された(cf., [雑誌論文])。

ハワイでも、自閉症の子どもを包括するコミュニティづくりにこのメソッドを試行する実践と研究も見られたが(cf., Benjamin 2004)。その後の研究と実践はさほど進展していなかった。p4cハワイというメソッドを、本研究の観点から、日本の学校にいつそう適したものへと研究開発し、実践を推進し、一定の所期の結果を得た点に、本研究の最大の成果がある。

特記されるべき成果は、以下の通りである。

(1) 研究者と実践者による実践と研究の後半なネットワークの形成

ネットワークの規模を示す指標として、毎月1度開催している研修会をあげることができる。そこには、毎回およそ15の公立小中学校から30名以上の実践者が参加している。またハワイの小中高校のp4cの実践者や研究者との交流も、年に3度、定期的に行なっており、6月にはハワイの実践者と研究者が宮城の学校現場を、8月と3月には宮城の実践者と研究者がハワイの学校現場を訪問し、共同で実践を行い、研究している。

また、宮城県白石市の公立の全小中学校は、2015年度より、この学習方法を取り入れるよう教育委員会が指導している。

こうしたネットワークの形成と継続によって、筆者単独では及ばないほどの多数の実践記録が収集できた。また筆者自身が、本研究テーマとの関連で助言したり、共同実践する機会も増え、下記のような注目すべき実践例を創出できた。

(2) 「子どもの哲学ハワイ=みやぎスタイル」の支援指導方法の開発

この指導法を日本の学校に導入した当初は、日本版への修正が必要と思われたが、この方法の実践と研究を重ねるにつれ、p4cハワイスタイルは、トランス・カルチュラル、つまり文化差を超えた方法であり、授業者となるファシリテーターが、その理念をいつそう深く理解し、従来の指導方法からp4cハワイのファシリテーション法へとシフトチェンジすることが重要である、ということが明らかとなった。

この指導法の特色は、以下の通りであり、この特色は、発達障害の子どもを包括する教育実践の、前述の主要な条件を満たしている。

ルールの提示と共有。第一に、相手を尊重しているものである限り、何を言っても安心安全という「セーフティ」を守ること。第

二に、コミュニティボールと呼ばれる毛糸のボールを持っている人だけが発言できる。第三に、ボールを持っていない参加者は、発言している人の言葉をよく聞く。第四に、ボールが回ってきてもパスできる。第五に、発言権が参加者全員に平等に与えられるよう配慮する。

子どもの「問い」を探求の対話の駆動力とする。

全員が尊重された楽しい雰囲気をつくり出す。お互いを見ながら聞き話せるように、円座になるのを基本とする。

相互に尊重しあいケアしあう「コミュニティ」の育成と、思考力と対話力の向上の両方をめざす「探求のコミュニティ」を格率とする。思考力向上のために、ジャクソンが開発した「深く考えるためのツールキット」(cf., [雑誌論文])を継続的に活用する。

あらゆる教科や教科外の活動で利用できる。

### (3) 注目すべき実践例の創出

この探求方法は、教師のコントロールを緩め、子どもの自由な活動の余地を開くため、子どもの様々な力が、ポジティブとネガティブの両方の意味で湧出するため、いわば「諸刃の剣」である。このことを、ファシリテーターである教師は熟知して実践する点が重要である。

#### 逆効果となった実践例

筆者を含め、研究者と実践者の理解が浅かった当初は特に、教育上好ましくない実践例が見られた。

その典型例は、本研究の着手前だが、2013年10月、小学2年生のクラスでの実践である。このクラスには、発達障害と診断されているA君の他、その疑いのある児童が3名ほどいた。p4cの実践1回目は順調であったが、2回目の授業後半、A君への攻撃的な発言が周囲から瞬間的に連発され、A君はパニックに陥ってしまった。

この実践例は、p4c ハワイみやぎの基本のルールが破られてしまった典型であるが、発達障害の子どもを包括する基本条件が、いかに重要であるかを、逆照射的に明らかにしたものだ。

#### 効果が現れた実践例

発達障害の有無にかかわらず、この探求方法を用いた授業では、他の通常の授業ではしゃべらない子ども、活躍しない子どもが、しゃべったり、活躍するという出来事が、頻繁に生じる(cf., 庄子他 2015, [雑誌論文])。ボールを持っている子どもだけが発

言でき、それ以外の子どもや教師は、その子の語りに耳を傾ける、というわかりやすいルールのおかげで、いつもの授業では、思いついた言葉を突発的にしゃべりまくる子どもが、黙って他の子どもの発言を聞くことができたり、緘黙傾向の子どもが、みんなの前で静かにゆっくり自分の言葉を紡ぎ出したりする実践例が、数多く観察・報告されている。

ここでは、二つの際立った事例を記しておきたい。

一つは、2016年9月に白石市の公立小学校4年生の学級で行ったp4cであり、筆者がファシリテーターをつとめ、担任教師の他に、同校の教諭や校長も対話に加わった。この学級では、これが初めてのp4cを活用した授業であった。

この学級には、知的発達に障害はないが、言語能力の発達に遅れが見られると診断された女子児童がいた。同校の校長も教員も、この女児の言葉を聞いたことがなく、発話能力はあるはずだが、本当に話せるのかどうか、教師たちには、わからないということであった。この女児は、授業中教室を飛び出すこともあり、教室にいても、教室の隅で固まっていたり、ノートを真っ黒に塗りつぶしたりしているとのことであった。日頃から担任教師たちは、この女児の問題行動に頻繁に悩まされていた。

授業はじめ、この女児は対話のサークルに入ってはいたものの、上着のフードを深くかぶって顔を隠し、椅子の上で膝を抱え、うつむき、筆者にもみんなにも背を向けていた。その姿は、この女児がみんなに見られ聞かれる公的世界を遮断し、自分だけの私的世界に閉じこもっていることを象徴的に表していた。

ところが、対話のゲームと探求が盛り上がり、教室に子どもたちの明るい笑いが頻発し、他の子どもの発言への感嘆や共感、ユニークな発想の発言が次々と出されるにつれ、この女児は次第に正対するようになり、徐々にフードをあげ、ついにはフードを取り、顔をあげ、みんなを見ながら、姿勢良く座って、他の子どもの発言に耳を傾けるようになった。そして、授業半ばの書く活動では、みんなと同調して書く作業を行い、担任教師へのメッセージを記した。授業後半には、さらに、隣の女児に何かを話しかけるのを筆者は目撃し、担任教師はこの女児の声を初めて聞くことになった。

この出来事には、同校の校長、教頭、担任教諭はじめ全教員が驚嘆した。加えて、同校教頭のその後の報告によれば、この出来事以来、この女児の問題行動は劇的に減少し、それまでは参加できなかった学校外の施設訪問などの課外活動にも参加できるようになり、この年度いっぱい良好な状態が持続したということである。

この事例については、雑誌論文で概要を発表したが、今後も継続して分析し発表

していく計画である。

#### <引用文献>

田端 健人、第7章 子どものケアと学校教育 - 教室の<空気>と<光>の現象学 - 、西平直編著、ケアと人間、ミネルヴァ書房、2013、165-186

フリス,U.、自閉症の謎を解き明かす、東京書籍、1991

杉山 登志郎他、高機能広汎性発達障害、ブレーン出版、2006

Iacoboni,M. *Mirroring People*, Picador, New York, 2008

田端 健人、通常学級に在籍する「特別な配慮を要する子ども」の世界疎外 - ハイデガーによる子どもの現存在論を導きとして - 、*学ぶと教えるの現象学研究*、14号、2011、31-44

Benjamin,L. “Rethinking Dialogue: Reflections on P4C with Autistic Children”, *The Journal of Philosophy For Children*, vol.17, Nr.1&2, Montclair State University, 2004, 24-29

庄子 修他、教育現場におけるp4c活用の可能性を探る、宮城教育大学教育復興支援センター紀要、第3巻、2015、51-60

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7件)

TABATA Taketo, “Der Grund, warum wir in Miyagi, Japan, mit Kindern philosophieren”, *Polylog*, 2017, 37, 査読有、掲載決定

TABATA Taketo, “The Reason Why We Do Philosophy with Children in Miyagi, Japan: Creating an Intellectually Safe Place”, *Polylog*, 2017, 37, 査読有、掲載決定

田端 健人、「子どもの哲学」ハワイにおける「場」の理論と実践 - コミュニティでの「言論と活動」の条件 - 、*学ぶと教えるの現象学研究*、査読無、17号、2017、14-22

田端 健人、子どもの哲学 (p4c) ハワイスタイルの精神療法的効果：対話による探求のコミュニティの現象学的省察、宮城教育大学紀要、査読無、51巻、2017、133-145

田端 健人、子どもの哲学 p4c による超自我の覚醒 - コミュニティ対話の現象学的心理学 - 、宮城教育大学教育復興支援センター紀要、査読無、4巻、2016、11-23

ロジャー・E・ブルーム / 田端 健人、容疑者追跡のパトカーで生きられた経験 - 現象学的心理学による記述的研究 - 、*学ぶと*

*教えるの現象学研究*、査読無、16号、2015、63-83

田端 健人、教育関係における他者の受容 - マルティン・ブーバーによるカール・ロジャース批判から - 、宮城教育大学紀要、査読無、49巻、2015、239-246

[学会発表](計 5件)

田端 健人、子どもの哲学 (p4c) ハワイにおける「場」の理論と実践 - コミュニティでの「活動と言論」の条件 - 、日本教育哲学会、東京大学(東京都文京区)、2016年10月9日-10日

田端 健人、子どもの哲学 (p4c) ハワイスタイルの精神療法的効果 - 対話による探求のコミュニティの現象学的省察 - 、日本教育方法学会、九州大学(福岡県福岡市)、2016年10月1日-2日

TABATA Taketo, The Phenomenology of the Group Dialogue: The Description of the Intellectually Safe Place of the p4c Miyagi in Japan, East-West Philosophers' Conference, University of Hawaii at Manoa(U.S.A.), 24<sup>th</sup>-31<sup>st</sup> May, 2016

田端 健人、現象学的アプローチ - 教室の<空気>と<光>を記述する試み - 、日本教育方法学会、広島大学(広島県広島市)、招待講演、2014年10月11日-12日

田端 健人、現象学アプローチ、日本教育哲学会、日本女子大学(神奈川県川崎市)、招待講演、2014年9月13日-14日

[図書](計 2件)

田端 健人、第7章 現象学と臨床教育学 - 科学技術への新たな架け橋 - 、矢野智司他編、臨床教育学、協同出版、2017、151-172、2017(刊行予定)

田端 健人、第4章第3節 現象学的アプローチ、日本教育方法学会編、教育方法学研究ハンドブック、学文社、2014、78-81  
〔産業財産権〕

[その他]

ホームページ等  
宮城教育大学

<http://www.miyakyo-u.ac.jp/>

田端健人 Blog

<http://tabata2014.blogspot.jp/>

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

田端 健人 (TABATA Taketo)  
宮城教育大学・教育学部・教授  
研究者番号：50344742

(2)研究分担者  
無し

(3)連携研究者  
無し

(4)研究協力者  
武田 純子 (TAKEDA Junko)